

特色ある学校

宮城県石巻工業高等学校の図書館経営について

－平成23年 子どもの読書活動 優秀実践校－

宮城県石巻工業高等学校 教諭 萱沼 俊一

1. はじめに

(1) 学校概要

開校より50年以上の歴史を有する全日制の工業高校（公立）である。機械制御科，電気情報科，土木システム科，化学技術科，建築科の5科で構成されており，全科あわせて1学年6学級（機械制御科のみ1学年2学級），全学年18学級となっている。生徒総数は700名程度であり，男女共学ではあるが工業高校という特性上，男子生徒が全体の9割以上を占有している。

(2) 立地条件

石巻市の中心部からやや西側に位置し，校地のすぐ北西側には北上運河（貞山運河）が流れ，南東側はJR仙石線と隣接している。正門付近（東側）は閑静な住宅街となっているが，北門側は石巻バイパスと隣接しており一日を通じて交通量が多い場所である。また，真南に3 kmほど行くと石巻湾があり工業地帯が広がっている。北に1 kmほどの位置には北上川が流れており，周囲を運河，川，海といったように多くの水に囲まれている。更に，運河を境界として地盤が低く緩やかなすり鉢状の地形に立地しているため東日本大震災では校舎の1階床上数十 cmまで浸水し，図書館では閲覧室の書架が転倒している。

2. 図書館概要

(1) 図書館の場所

校舎は，管理棟，教室棟，実習棟の3つの建物で構成されている。そのうち図書館は3階に位置し，管理棟と教室棟を結ぶ歩廊とともに建築されている。上部には南北に連窓の天窓が設置され，東面からは直接採光可能であり，西面からも歩廊を緩衝域としながら採光可能なため非常に明るい空間を確保できている。また，食堂と隣接していることや3階から管理棟や体育館に移動する際の経路となっているため，日常において多数の生徒が図書館前の歩廊（掲示や装飾など図書館の一部として機能している。）を利用しており，生徒たちが必然的に図書館の存在を認知し意識できるような室配置となっている。





(2) 蔵書と資料

図書館自体の蔵書に加えて、各科にも配本を実施し、学校全体に図書を分散させることで図書の利用を促進させている。図書館内の蔵書数(閉架含む)は25,170冊(うち視聴覚資料708点)、機械制御科311冊、電気情報科196冊、土木システム科250冊、化学技術科319冊、建築科175冊である。高等教育機関などに比べると桁違いに蔵書数が少なく、収蔵できるスペースも極めて小さいのが実情であるが毎年度、図書の廃棄と選書購入による図書の新陳代謝を促進し、可能な範囲で図書資料の拡充と更新に努めている。

(3) 実行予算

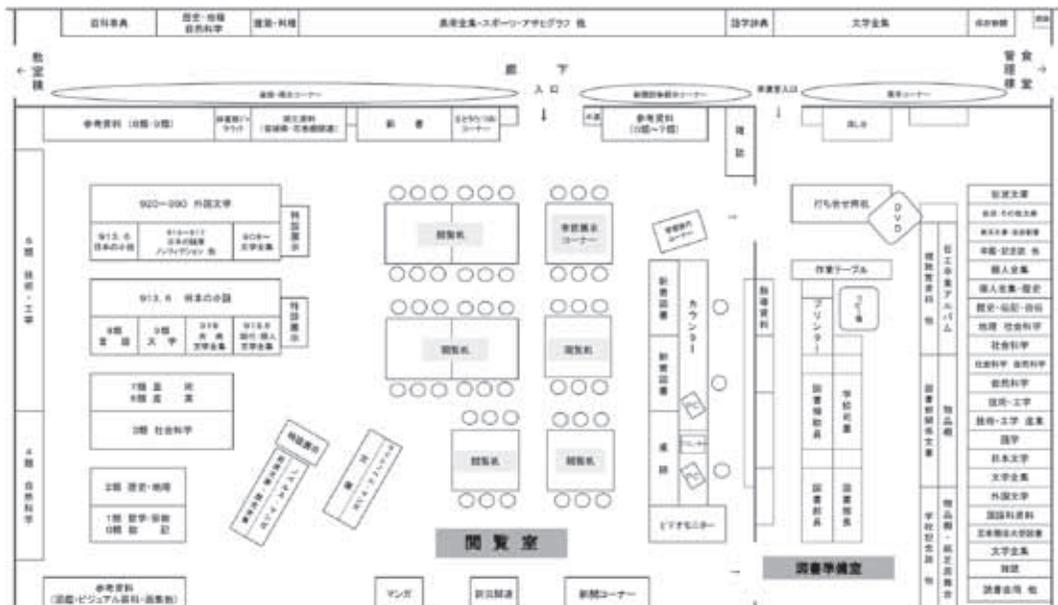
物品購入の予算総額は1,400,000円程度である。うち生徒からは年度初めに図書資料管理費として1人あたり毎年度1,000円を徴収している。生徒徴収金以外の予算としては公費、団体

費、その他のものが含まれる。図書購入費として970,000円程度が執行されているが、運営上はまったく余裕の見込めない予算となっており工業高校で必須となる専門書の拡充を実現するためには予算の確保が喫緊の課題となっている。

3. 図書館経営について

(1) 図書部と図書準備室

校務分掌において図書部は他の分掌の一部としてではなく、独立した部門として設置されている。多くの学校では、他分掌の一部であったり情報部と業務が融合していたりすることが多いが、その場合デメリットの色合いの方が強い傾向にあり結果として図書館の機能低下を加速度的に誘発してしまっている。現時点での人員は普通科教員3名、工業科教員1名、専任の図書館司書1名の合計5名となっている。うち図書部長を含む教員2名と司書1名の3名が閲覧



室に隣接配置された図書準備室に常駐している。隔週で定例の図書部会議を実施し、各々の役割分担に応じて適宜進捗状況を確認し、相互に情報共有を図りながら毎月の図書部運営を遂行している。閲覧室と図書準備室は絶えず扉を開放し、隔壁の高さも2,000mm程度に抑制することで両室が半開放的な空間として成立しており、閲覧室、図書準備室、廊下の3つの空間を総合的に運用することで、校内において図書館は特有の雰囲気形成している。特に肝要なのが、図書準備室に絶えず教職員がいるという事実である。生徒たちにとって身近な居場所として教室以外には、保健室を挙げられることが多いが、本校においては保健室と並び図書館が有効に「居場所」として機能しているのである。学級に馴染めない生徒や自分が帰属する「場」を見つけられない生徒にとっては、教職員が常駐していることで安心して落ち着ける「居場所」となっているのである。休み時間や放課後に図書館を訪れては教職員との何気ない会話や学校生活や学習方法の相談に勤しむ場面が日常化している。

(2) 図書委員会

各学級から2名ずつ、合計36名が図書委員会に所属している。36名はそれぞれ4つの班の何れかに所属し、日々の活動に携わっている。

委員会の会合は図書委員長を中心に月に5回程度、ほぼ毎週図書館で実施されている。

◎読み聞かせ班（10名）

・月2回程度、近接する小学校で紙芝居や絵本の読み聞かせを行う。

◎新聞・資料整理班（10名）

・毎朝各クラスに新聞を配布する。
・書架の整理を行い、学級文庫を管理する。

◎企画班（7名）

・図書館行事の企画、運営を行う。

◎広報班（9名）

・葉明報の編集や掲示物の制作と更新を行う。

その他、図書委員全員で実施するものや交代制で実施している活動もあり、図書委員の活動が図書館経営の根幹を支えるものとなっている。



(3) 読み聞かせ活動

近接する小学校に対して読み聞かせ班に所属する委員と、図書委員ではないがこの活動に賛同する有志参加の生徒が年間13回程度、約10名（2ユニット）で1回につき4学級を分担して絵本や紙芝居を児童に対して読み聞かせている。ハロウィンやクリスマスの季節には仮装して訪問し本校生徒の来訪を心待ちにしている児童からも大変好評である。練習機会を含めて生徒の読書活動の意欲を喚起するとともに児童との関わり合いの中で社会性も涵養されることから両者にとって有用な活動となっている。また、愛知県産業労働部で作成した紙芝居のデータについて借用許可を得て活用している。これは職人を主題とした紙芝居で、高学年の児童に対する読み聞かせで使用することによって工業高校への興味関心を誘起する広報的な狙いもある。



(4) 季節行事, 季節展示

企画班が中心となり季節ごとに多彩な行事を企画運営している。(以下に一例を紹介する。)

◎学校図書館の日

- ・紙芝居の上演と、それに伴う謎解きなど。

◎納涼会

・夏季にかき氷を食べながら怖い本の論評と輪読会の実施。怖い本の展示。(涼しさを求めて。)

◎文化祭

・図書室を一般開放し、和綴じ製本の体験、古書の配本、秋に読みたい本の展示、リサイクルしおりの配布、活動紹介、お茶やコーヒーを提供する体験型の休憩コーナーを設営している。

◎節分

- ・鬼のぬいぐるみ(書架上に鎮座)を用いた豆まきと鬼にまつわる本の論評と輪読会の実施。

◎3年生を送る会

・卒業する図書委員に対して後輩から集合写真と寄せ書きの贈呈。卒業に際して読んでほしい本の紹介。別れと出会いに関する本の展示。

このような行事と季節展示を媒介として四季の変化に対応した図書との付き合い方を提案し、図書との関わり方には多彩なアプローチの仕方があることを経験させている。またこれらの活動を通じて生涯学習への足掛かりとさせている。



(5) 館内整備

既存のものを安易に購入するのではなく、生徒と協働して館内の整備を実施している。館内に展示してある絵画の耐震補強や新聞配本用の

収納BOX, 図書準備室の収蔵棚の製作, 観葉植物の鉢替えなどを実践。生徒自身が館内整備に関わることで親近感と愛着が醸成されていく。

(6) 朝読書・全校読書会

前期と後期にそれぞれ2週間の朝読書と、年に1度のディスカッション形式の全校読書会を実践している。図書と疎遠になりがちな生徒にとっても図書と向き合うよい契機となっている。

(7) 三校学校図書館担当者連絡会

小・中学校の図書館担当者と連携し、情報交換を促進していくことで「各学校における図書館経営の改善に何らかの方策を見出せるのではないか。」「継続的な読書指導やそれぞれの段階での支援の在り方について気づくことができるのではないか。」との思いから、隣接する(徒歩5分程度)小・中学校との相互協力の実施を考えたのが本会の設立主旨である。本校が幹事校となり年に2回の連絡会を実施している。取り組みの成果として、小学校での読み聞かせ活動や中学生を来館させての司書業務体験(職業体験の一環として)の実現を挙げることができる。

4. おわりに

高等教育機関に附置されたものを除く学校図書館は、近年その規模を急激に縮減している。予算、人員、施設、取り扱いのすべてにおいてその傾向が顕著である。しかしながら私たち人類の歩んできた歴史が実証してきたように、図書を媒介とした交流や経験、知識や知恵との遭遇は、ヒトがヒトであるために欠くことのできない因子となっている。なればこそ、目の前の課題から目を背けることなく前向きに小さな取組をコツコツと積み上げていくことこそが肝要であると感じている。本稿を目にした教職員が1人でも多く図書館経営に興味関心を抱いて邁進していただけたならば慶賀の至りである。